

ここに地終わり 海始まる 上

miyamoto teru

宮本輝



ここに^{ち お}地終わり ^{うみはじ}海始まる (上)

みやもと てる
宮本 輝

© Teru Miyamoto 1994



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1994年10月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——株式会社精興社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-185797-5

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

ここに地終わり 海始まる (上)

宮本 輝

講談社

目次

第一章	絵葉書
第二章	薪ストーブ
第三章	雲のかたち
第四章	迷走
第五章	ふたりの人

255 206 135 78 9

ここに地終わり

海始まる

上
卷

第一章 絵葉書

あす二十四歳の誕生日を迎えるという日の午前十時ごろ、天野志穂子は生まれて初めて、ひとりで電車に乗った。

ほんとうは、通勤客が押しあいへしあいしている満員電車に乗りたかったのだが、やはり彼女自身、臆する気持ちもあったし、両親にも妹にも反対されたので、混み合う時間を避けたのだった。

志穂子は、電車のドアが閉まって動きだしたとたん、上気してきた頬を、冷たい指でそつと押さえて冷やしながら、目を車内のあちこちに向け、

「教養をつまなければ」

と胸の内と言った。

三月半ばの午前の光は、進行方向の少し左側から車内に差し込んでいて、ドアのところに立っているいかにも女子大生といった服装の三人連れの、丁寧にシャンプーされている長い髪を栗色に輝かせていた。

志穂子は、自分の指がいつこうに温かくならないのを、緊張のせいだと思った。自分は、いますごく緊張している。だって、生まれて初めて、ひとりで電車に乗って、都心へ出て行くのだから……。

志穂子はそう思いながら、浦辺先生のいつも温かかった指を思い出し、二カ月後の浦辺先生の還暦祝いに何をプレゼントしようかと考えた。昔は、浦辺先生は診察服のポケットにベリン式のカイロを入れ、それでしょっちゅう指を温めていた。何年か前に、使い捨てカイロが出来てからはそれに代わった。

「病人は、他人の冷たい指で体をさわられるのはいやなんなんだよ」

浦辺先生は、カイロをポケットから落とすたびに、照れ臭そうにそう言っただけ……。

志穂子は、十八年間に暮らした北軽井沢の結核療養所のことは、いまは出来るだけ思い出したくなかった。だが、還暦と同時に停年退職となる浦辺先生が、療養所からいなくなってしまうことを考えると、いままなお入院生活をつづけている何人かの親しかった患者たちの

顔を思い浮かべてしまうのだった。

志穂子はその療養所から退院して、ちょうど半年がたっている。志穂子はその半年間、横浜の大倉山にある自宅の周辺を歩き廻ったり、新聞をこまめに読んだり、母と一緒に近所のスーパーマーケットに行ったりしてすごしてきた。

それが、主治医の浦辺先生が志穂子に与えたりハビリテーションの第一段階であった。

「ねエ、これだけは頭に入れとくんだよ。志穂ちゃんが世の中に最初の一步を踏みだすのは、小学校を卒業したばかりの子供が、中学に行かずに世の中に出て行くよりも、うんと大変なんだよ」

退院の日が決まったとき、浦辺先生は、志穂子を自分の部屋に招き、紅茶とクッキーをご馳走してくれながらそう言った。浦辺先生のいつもの、のんびりした笑顔は、その瞬間消えていたのだった。

志穂子は、東横線の沿線の、まだ春の兆しなどまるでないかに見える風景に目をやりながら、自分は浦辺先生があのととき何を言いたかったのか、理屈のうえではよく理解していると思った。

しかし、それはあくまで理屈のうえでのことであって、実際、どんなことが現実の問題として起こってくるのかは、わからないのだった。

浦辺先生に言わせれば、とにかく、きみは六歳のときから十八年間も、静かな療養所で入

院生活をつづけてきたので、きみの体内時計も、人生におけるカレンダーも、世間の動きとは大きなずれがあり、それは簡単には融合しないとのことだった。

そのずれは、思いも寄らない精神的疲労とか焦燥とか苛立ちとかを運んで来るだろう。しかし、決して焦ってはいけない。人間とはうまく出来ていて、いつのまにか自然に物事に慣れて行くものだから、精神がついていけなくなったら、好きな音楽でも聴きながら、二、三日ぼんやりしてたらいい。体力がついていけなくなれば、自分自身に虚勢をはずす、ゆつくり休むんだ。

浦辺先生は、噛^かんで含めるようにそう言った。そして、

「まず、歩くこと。それから、人間というやつに慣れること。もうひとつは、世の中の音つてやつに慣れる。音というより、騒音だね。志穂ちゃん、この十八年間、耳にしたことのない気持ちの悪い音が、世の中には充満してるからね」

と教えてくれた。それから、結核の再発については、充分注意をはらいながらも決して不安がらないことと注意を与え、志穂子を送り出してくれたのだった。

志穂子は、車内の人々をそつと見つめ、元気のなさそうな、顔の色艶の悪い人を捜した。十八年間、志穂子は病んだ人々と生活をともにしてきたので、血色のいい人が必ずしも健康状態にあるのではないことを知っていた。微熱が、目に光を与えたり、頬を上気させたりする場合がある。青黒い顔色の人、最も危ない……。

そう思つて観察すると、あつちにもこつちにも、病人の範疇はんちゆうに入りそうな顔色があつた。そして、確かに、奇妙な音が幾つも重なつて志穂子の神経を刺激してきた。電車の車輪がレールのつなぎめを通過する音、乗客の何人かのおしゃべり、車外から飛び込んで来る宣伝カ―の音、近くの男が貧乏ゆすりをして靴で床を打つ音……。

志穂子は、しばらく両の耳を掌で押さえた。それから軽く頭を振り、妹の美樹に頼んで調べてもらったヘヤマキ・プロダクションの事務所の電話番号と住所、それに渋谷駅からの道順の描かれてある地図をハンドバッグから出した。もし、きょう、梶井克哉と逢えたりしたら、自分はうまく話が出来るだろうかと考えたとたん、温まりかけていた指がまた冷たくなつていった。

東横線の渋谷駅に着くと、志穂子はプラットホームのベンチに腰を下ろし、心を落ち着かせようと、首を前後左右に動かす体操をした。

通勤のラッシュ時を過ぎていても、駅には多勢の人間が行き来していて、志穂子を疲れさせてきた。なんとなくぼんやりして焦点の定まらない視界をはつきりさせようと、志穂子は何度かまばたきをし、

「これが人に酔うつてことなんだわ」とひとりごちた。

出がけに母が、

「人に酔って気分が悪くなったら、無理しないで、すぐに帰ってくるのよ。元気な人でもあんまり長く人混みの中にいると、頭がぼおつとしたり、ふらふらしたりするんだから」

と言った言葉を思いだし、志穂子はふいに弱気になったが、

「なんのこれしき。これも修業だ」

そうみずからを鼓舞して、改札口へと歩きだした。排気ガスの臭いが、志穂子の呼吸を小さくさせた。

信号を三つ渡り、大きなスポーツ用品店のある交差点を左に折れて、そこからすぐに次の角をまた左に曲がると、車が一台通れるほどの、一方通行の路地があった。

妹の美樹が描いた地図には、その路地の真ん中あたりに、ロビンソンという喫茶店があり、ヤマキ・プロダクションの事務所は、そこから二十メートルほど先にあることになっている。

志穂子は、ロビンソンの前で立ち停まり、腕時計を見やった。十一時を少し廻ったところだった。廃品回収業の軽トラックがやって来たので、志穂子は道の端に寄り、ヤマキ・プロダクションの事務所がある五階建てのビルを見た。家を出てから一時間と少ししかたっていないのに、ひどく目が疲れてしまっているのが不思議だった。

気がつく、自分の周囲には、あっちこちに光を反射させるものがひしめいていた。建物のガラスやサッシも、通り過ぎる車の車体にも、とにかくいたるところに反射物があつて、

それが志穂子の目に入ってくる。

志穂子は、夥^{おびただ}しい音の集積よりも、反射物の光を苦痛に感じた。どうして、何もかもを、こんなにも鏡みたいに光らせねばならないのだろう……。何もかもにメツキをして、不必要な光沢をもたらししているのはなぜだろう……。

目が痛くなり、それにともなうて、息苦しさも感じて、志穂子は、ヤマキ・プロダクションのあるビルに入ると、エレベーターに乗らずに階段を昇った。

ヤマキ・プロダクションは、ビルの三階にあつたが、事務所の入り口には鍵がかかり、へこの用の方は、ロビンソンという喫茶店にお越し下さいと書かれた紙が、ドアに貼つてあつた。事務所の前の通路には、ラーメンや井物の鉢が置きっぱなしで、数匹の蠅がその中で動いていた。

もつと活気のある、洗練された事務所を想像していたので、志穂子は、ひよつとしたら妹の美樹の間違いではなからうかと思つた。このヤマキ・プロダクションという会社と、梶井克哉が所属しているヤマキ・プロダクションとは、まったく別の会社なのではないだろうか……。

志穂子は、あちこちがはがれかけているリノリウムの床に目を落とし、再び階段を降りて、ロビンソンという喫茶店に向かった。

ロビンソンは、木目の調度品を使った、落ち着いた雰囲気、フランクのソナタが適度な